

『新国語研究』第54号 目次

巻頭言（理事長挨拶）

平岡 香子

特集・・大阪府立今宮高校国語科学校設定科目

「私達が立っている場所」開講二五周年記念

【ことばの教育の定位と挑戦】

「私達まつり」を読み解く

「私達まつり」第一弾

「私達まつり」第二弾

新国語研究の復刊にあたって

報告 ようこそ、国語土曜塾

国語土曜塾と私

令和6年度第一回国語土曜塾報告（国語土曜塾に参加して）

第35回国語土曜塾（企画運営に携わって）

国語土曜塾 これまでの歩み

小山 秀樹	5
田中 啓介	6
伊藤 光史	10
中井明日香	16
伊藤 光史	34
伊藤 光史	35
伊藤 光史	36
伊藤 光史	37
伊藤 光史	40
伊藤 光史	43

報告 生き生きとした言葉の教室をめざして

――さまざまな表現実践から――

報告 臨地研究 文楽をめぐる

① 「本物に触れる機会」を持ち続けるために

曾根崎心中資料

② グローカルな伝統芸能

③ 文楽との出会いと国語研究

報告 「新企画」秋の公開研究授業

歴代理事長

会則

編集後記

田中 啓介	48
池田 貴之	56
江原 義哉	58
大浦 泰典	64
武永 隆幸	67
武永 隆幸	69
武永 隆幸	73
武永 隆幸	74
武永 隆幸	76

題字「新国語研究」 日展評議員 近藤摂南先生
表紙・本文挿絵 川口麻里亜 大阪府立今宮高校 総合学科16期卒

大阪府立今宮高校・国語科学校設定科目
「私達が立っている場所」開講二五周年記念
ことばの教育の定位と挑戦

今宮高校には、国語科学校設定科目として「私達が立っている場所」が開講されています。この授業では、ことばを鍛えて豊かな社会生活をめざします。二〇〇〇年に始まり、昨年二五年を迎えました。卒業した受講生は八〇〇名を超えます。

開講二五年特別企画として、卒業生、保護者、有識者などが集い、学びあう「私達まつり」を開催しました。それは以下のような概要となりました。

「私達まつり」第一弾 ―特別授業・研究協議―

日時 二〇二四年一月一五日（金） 15:20～16:50
場所 大阪府立今宮高校 会議室

特別授業

【授業者】

森木乃美（四天王寺高等学校・中学校教諭 総合学科16期）

坂井田暖（大阪医療センター附属看護学校3年 総合学科24期）

藤本藍里（京都女子大学法学部法学科1年生 総合学科26期）

研究協議

植山俊宏（京都教育大学特定教授 全国大学国語教育学会理事長）

杉本 舞（関西大学社会学部教授・科学技術史）

桒井英人（京都大学・関西大学非常勤講師）

小山秀樹（大阪府立今宮高校教諭）

「私達まつり」第二弾 ―スペシャルトーク・ディスカッション―

日時 二〇二五年一月二五日（土） 13:00～17:00
場所 大阪府立今宮高校 多目的ホール

スペシャルトーク

金城宗幸（漫画原作者）

石井英真（京都大学准教授）

山元隆春（広島大学教授）

ディスカッション

三人のスペシャルトークメンバー

桒井英人（京都大学・関西大学非常勤講師）

小山秀樹（大阪府立今宮高校教諭）

ご参加の皆様（教職員、卒業生、保護者、一般の方 約130名）

「私達まつり」を読み解く

大阪府立今宮高校教諭 小山 秀樹

◆「私達が立っている場所」二五年と「私達まつり」の構想

最初に、ことばの教育と国語の授業について私自身の個体史を手がかりに、現在考えていることを述べておきたいと思います。人と



ともに生み出され、人とともに持つことばが困難な状況にさらされている私達を励まし、救うことに私が気づいたのは、高校時代の国語の授業でした。私は大学時代、読書会、文学雑誌の発行、映画づくりに没頭し、国語教師となりました。人とともに持つことばを教室という場で次世代とともに紡ぎ、それぞれの生活に資するという論理は、それが困難な状況

のなかでどう可能かという生き方の問題となります。「論理は終わった。あとは運動として生きるだけだ。」私はそう考えました。なぜ論理は終わっているのか。それは、ことばが共有される教室という場で、人とともに持つことばをつくり続けることが国語教師としての使命であることは揺るがないことだと考えたからです。その使命を、ことばをつくり続けるという当事者として果たしたいと強く願ったからです。なぜ運動として生きるだけなのか。指示や解説をするものになるのではなく、いつも実践を持って生きてこそ初めてそのことばは他人の思考や行動の契機になります。予想される困難な職場や社会状況のなかで接近戦に負けないで必ず実現させるのだという覚悟が「運動として生きる」ということばの原像です。

ことばは人間の性質、資質、成育の過程などからさまざまにあらわされます。私は、獲得したことばを蓄積してよりよく生きてほしいという願いをもとに、特別な場面をつくってことばを共有することとを常にこころがけて授業を続けました。国語には、単元的な学習という深い蓄積があります。名のある、また身近な先輩方の実践の場面と指導のことばに大きく勇気づけられたことは言うまでもありません。つたない実践のなかから、「私達が帰っていく場所」「私達が立っている場所」「私達がつくっていく場所」という単元の着想を得ました。たしか三五歳の時だったと思います。「帰っていく場所」は、主に古典を教材にしながら自身の根拠を見つめる授業です。「立っている場所」では社会の課題を明示し、どう生きるかを考えます。「つくっていく場所」は、今後の自身を構想し、ことばにする学習です。これらの三つの単元を通して、若い学習者のことばを

鍛え、次世代とともに私も救われ、豊かに生きることにつなげたいと考えました。なかでも「私達が立っている場所」は、三つの中心ともなる単元で、今宮高校で国語科学学校設定科目として受講者とともに育ち、二五年になりました。

授業開講二五周年を区切りにして開催した「私達まつり」は、私とこの稿を読む者にどのような「人とともに持つことば」を生み出すのか。「私達まつり」を読み解く記録・資料として冊子を三冊用意しました。（資料ⅠⅡⅢ デジタルブック版・ダウンロード版を作りました。当日の様子は動画資料掲載のURLからご覧ください。）かわった人たちの声に耳を傾け、振りかえるということが、意味と価値を探るための一番有効な方法となるように思います。

◆ことばの教育の定位と挑戦、あるいはひとりひとりが自身の「私達まつり」を

私の気づきは、五十年前に尾谷誠基先生のことばに触れたところから始まりました。

肝心なのは、雑誌ではなく文学でもない。九人が不断に相対化されうる場なのだ。この場なくして文学は所詮たったひとりの営為に過ぎない。

僕らは己一個に対して誠実であることよりも、九人の場に対して誠実であることが、己に対してもより誠実であるような、そういう場をなんとしてでもつくり出して見せねばなるまい。そうでなければ己一個の死とともにやがては墓場へと葬り去られる真実をしか僕

らは手にできようはずがないからである。すべてが始まり続けている。

人とともに持つことばを求めたつづけた私の教育活動は、今回は「私達まつり」という運動のかたちをとりました。私は「私達が立っている場所」の教室で、人とともにことばを持つとう、教材と学習者の生活を繋ごうと教材、目標、方法を鍛えて来ました。「私達まつり」は世代を超えてことばを持ちあおうとする試みです。「私達まつり」では「ことばの学び」についての視点、観点、知見をはじめとして、ことばの学習が年月を経てどのような成果をもたらしたかを検証するという価値も持つことができました。私は「ことばの教育の定位と挑戦」ということばが毎日の意欲や力になるより具体的なことばへ変換できればとこの稿を進めてきました。資料ⅠⅡⅢ、ダイジェスト動画を参照の上この稿を読み進んでいただければ、ことばの教育についての「定位」とこれからの教育活動への「挑戦」のヒントが生まれる場所が必ずあると思います。ひとりひとりが自身の実践をあたまに置きながら読み進み、気になったり立ち止まったりした箇所がまさにその人にとっての「定位」と「挑戦」が明滅する地点に違いなく、ことばがより具体的、実践的に変換される場所です。生み出されたことばはこれまでのことばと似ているかもしれませんが自分自身が主体的に勝ち取っているという点においては、これまでとは非連続なものです。しかし、自分自身もまたこれまでの人たちが経験してきたような行為を現在重ね、自身の固有の軌跡を描いているという点においては大きく連続しています。「非連続の連続」



は、つづく世代の「定位」と「挑戦」をより具体的に深化させます。なぜなら、私やともに学んだ私の仲間たちも同時代や過去の資料や現場からそんなふうに学び、「定位」や「挑戦」を実際にあつかうことができるものに変換し、掘り下げながら生きてきたからです。

「個体史」の概念は、運動として生きること、を大いに勇気づけます。「単元」「主題単元」の構想は、授業にダイナミズムをもたらします。「価値学習」「技能学習」「小さなステップ」「評価はひとえに奨励のためにある」など、私自身の実践のヒントとなることばを書物や先生、先輩、友人から学びました。

金城宗幸さんは第二弾ディスカッションで教育のついで次のような期待を話しています。

ひとつ思うのは、小山先生、今日、お会いして、やっぱりこの人はこれしかないというスペシャリストじゃないですか。「私達」が立つ

き、話し、みなさんを含む「私達」の意味と価値を更新、創造してもらえればと思います。

【資料Ⅰ】

「私達」は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル

―「受講生の声」編―

デジタルブック版
https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/18503/
PDFダウンロード版
https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe.pdf

【資料Ⅱ】

「私達」は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル

―「私達まつり」授業・研究協議編―

デジタルブック版
https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/19751/
PDFダウンロード版
https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe2.pdf

ている場所」の人。教育システムは行政が変えるしかないけれど、そうじゃなくてマンパワーというか個人で、例えば小山先生のような人がみんなにトゲを刺し続ける。そういうふうにそれぞれの教員の方がスペシャリストになって、自分の惑星をつくっていったら、教育がちょっとずつ改善されていくかもしれない。それくらいの個人の決断とか、覚悟とか、スペシャルになるんだという、そういう人が欲しいと思う。夢があるし。自分の人生のスペシャリスト。だからあなたのスペシャルな道はきつとあって、システムと戦うとはそういうことだと思っています。できればそういうふうに教育が進んでいけばいいなと思っています。

「私達が立っている場所」の学びは思考された文章をもとに自身の生活を重ねなおし、ことばをリアルタイムに創出、共有するという単元的なことばの学びでした。生み出されたことばは、同じ現在を生きる同士でかわされることによって力を持ち、生きて根を下ろします。自分が考えていたことは誰もが考えていたことだった。しかし、(あるいはそれだから)誰もが考えていたことに自分がたどりつき、自分のことばとして話し出したことは、自分にとって、またそれに耳を傾ける人にとってかけがえのないことだった。「私」が「私達」になり、「私達」のなかに「私」を見いだすことばのひとつひとつがともに生きる「私達」の未来を構想します。そのことばと、そのことばを生み出す場面をつくり続ける運動が、ことばの教育の定位を確信した挑戦になればと思います。そうしてつづく若いみなさんがその自身のこころの動きから出発してそのことばを聞

【資料Ⅲ】

「私達」は現在、こんなふうに考え、生きていますスペシャル

―「私達まつり」スペシャルトーク・ディスカッション編―

デジタルブック版
https://www.adjustbook.com/doc/us/14151/bk/22566/
PDFダウンロード版
https://www.osaka-c.ed.jp/imamiya/watashitachi/wataspe3.pdf



「私達まつり」第一弾

―特別授業・研究協議―

◆特別授業◆

私達は現在、こんなふうを考え、生きています

―卒業生の現役生への授業―

【授業者】

森木乃美（四天王寺高等学校・中学校教諭 総合学科16期）
坂井田暖（大阪医療センター附属看護学校3年 総合学科24期）
藤本藍里（京都女子大学法学部法学科1年生 総合学科26期）

扱う教材は『『である』ことと『する』こと』（丸山真男）、「文学のふるさと」（坂口安吾）、「安楽への全体主義」（藤田省三）です。卒業生、現役生ともに同じ教材を学習していて、卒業生が自身にとってその教材が現在どんな意味を持っているか、自身の現在と重ねて現役生に投げかけます。「である」と「する」、「ふるさと」と「大人の仕事」、「高度技術社会」や「能動的ニヒリズム」といった教材中の語彙が自身の生活経験に切り結ばれ、異なった世代による教材の読み込みを通して現代社会に生きるというリアルをことばでつかみなおすことはできないかという構想です。三人の授業者は、現役生に事前アンケートをとり、現役生が今どんなことを考えているのかを知り、それをもとに授業をつくりあげました。

榊井 本日の授業は、卒業生3人が担当するというスタイルでした。研究協議では国語という枠を超え、いろんな立場から話し合いたいと思います。授業の感想、小山先生への質問など、気楽にご発言ください。

―（〇高校） 教員になってすぐの頃、「私達が立っている場所」の授業を拝見した時は圧倒されました。前で生徒が授業をして、小山先生が後ろからバシバシ突っ込んでいく。あまりの衝撃にその時は受け入れられなかったのですが、それを噛み砕きながら、今は私も後ろでバシバシ突っ込む授業をやってみたりしています。今日の授業では、文章を読ませる時に、それぞれの実生活や人生とのつながりが大事なのだとして改めて認識しました。私は常に「これって君のこういうことと近くない？」という話をするようにしています。今日は「今の高校生の実生活と骨のある文章のここがつながってるよね」という投げかけが確認でき、さらに同じ文章を読んだ先輩たちとのつながりが強く感じられ、そういう点でも面白い試みだなと思いました。



最近、目に見えて効果が分かるものばかりが評価される傾向にあります。見えないものを計ることへの軽視を僕は憂慮しているのですが、今日思ったのは、文章を

◆研究協議◆

授業で種を蒔く、ことばが花開く

「私達が立っている場所」の受講卒業生3名による現役生への授業に続き、研究協議は、まず今宮高校・中須賀校長が開催挨拶、授業者への労い、次に小山先生から登壇者の紹介。その後、榊井英人先生の進行により、90分にわたる濃密な論議が繰り広げられました。

【参加者】

植山俊宏

（京都教育大学特定教授 全国大学国語教育学会理事長／「私達が立っている場所」を25年にわたって見守る）

杉本舞

（関西大学社会学部教授・科学技術史／小山先生が三年間担任。本日の授業者、森木乃美が奈良女子大学で指導を受けたというつながりも）

榊井英人

（京都大学・関西大学非常勤講師／小山秀樹とは附属天王寺高校で同僚。30年以上の付き合い）

小山秀樹

（大阪府立今宮高校教諭／「私達まつり」を企画・構想）

三人の授業者

森木乃美、坂井田暖、藤本藍里

ご参加の皆様（教職員、卒業生、一般の方 約50名）

（敬称略）

読むことの意味は現時点では計れない。それが後になって分かってくるのかなど。こんな効果があると今は言えなくても、文章を読み込む意味はあるのだろうと改めて思いました。

小山 長く同じ文章を読むということでは、例えば、川端康成の掌小説「バッタと鈴虫」などの教材を試してみたこともあります。高校生の今につながる今日の三つの教材は外せないというところに立ち戻ってきました。卒業生のアンケート集のなかには、よくそこまで考えているなと驚かされることばがあるんです。それが、高校時代にはおよそそれを書くような授業態度や取り組みにはほど遠かった生徒なんですよ。だから、ばらまきでいいと思います。種をばらまいといたら、いつか自分で咲かしてくれんというところが、かなりの確率で起きます。その時々状況に負けないで、蒔き続けることが必要なんじゃないかなと思っています。

榊井 なるほど、種を蒔いておけばよいということでしょうか。

杉本 私は一九九六、八年、大教大附属天王寺校舎の小山先生の授業で今日の教材、『『である』ことと『する』こと』や「文学のふるさと」を学び、他に「こころ」を一年間読んだりもしました。それから28年、小山先生にお聞きしたくて温めてきたことがあります。それは、テキストの読みということはどう考えておられるのか、ということ。一九九七年、2年B組の現代文の授業で「こころ」を読んでいました。班ごとで担当して解釈を発表していくという授業でしたが、中には「えっ、そんな読みができる？」みたいな発表もあるのです。当時、「新世紀エヴァンゲリオン」というアニメが流行っていて、そのアニメに引き付けたある意味ペダンティック

な感じの解釈の発表が続いたことがありました。当時、私は、あまりにも作者の意図を曲解しすぎじゃないのかなという印象を抱いたのですが、先生はその場を流して終わり、そのことが心の底にずっと引っかかっていたのです。というのは、大学生に輪読させる時、私はできるだけ身勝手な読みはしないようにという考えを伝えます。そしてら学生は、じゃあ正解はあるんですかと言う。小山先生は、高校生が高校生なりに解釈したテキストの読みをどういうふうに捉えてくれたのでしょうか。

大学1年生を指導していると、実生活とつながりにくい抽象的、理論的な内容を、理解の外に追いやろうという学生が少なからずいます。哲学や思想の難しい内容は、実生活とはかけ離れていて理解しづらい時もあるわけです。そういうような内容をどう取り扱っていけばよいのか。小山先生はどのように考えてくれたのか、私の28年のためにお答えをお願いいたします（笑）。

梶井 一つ目はテキスト解釈の問題。つまり解釈を生徒に任せた時に生じる問題。そしてもう一つは実生活とのつながり。「そんな俺関係あらへんし」みたいになる問題。この二つのテーマについてお聞きしてみます。

M（K高校） 杉本先生のご発言に関連して、自由な読みということについてお話ししたいと思います。私も2年生で「こころ」を取り上げ、様々な語句を自分たちで定義づけようという授業を行いました。グループワークで「こころ」を読んで、小山先生のように後ろでわーっというのではないのですけども、ぐるぐる回りながら生徒に論議させました。その時に考えていたのは、自分の感想や思いを持

ます。僕は在学時、幾度も自分のセクシャルについての発表をしました。常に本を使わずに、自分の解釈を突き詰めていって、それを発表するということをしたんですね。それがいつも高い評価をいただいて。でも、皆さんの言うように、もともとあることばからどんな離れていくみたいなの、そういう感覚があって、高い評価をいただいても、君の世界観はすごいね、芸術だねと言われているような感じで、理解はされても認められていない感がありました。国語教師を目標そうとしている身として、自分の広がり続ける世界観をい

かに抽象化してみんなに分かりやすいメジャーなことばで抽象化するか。そして、「君たちはどう生きるか」の発表の時に、小山先生が大事だとおっしゃっていた「帰りを道をつくること」、つまり「抽象化したところからもう一度自分に戻り、足元を見つめること」が自分の課題だなと。そう思って日々塾で勉強を教えたりしています。

M（理科教員・総合学科5期生） 国語に限らずすべての教科の目的は、正解を教えることじゃない。僕は、授業をすることの目的は、小山先生がおっしゃる「種を蒔く



つことは自由だということ。なぜかという、それぞれのバックグラウンドは違うから。「個人の思いを抱くのは自由である。それを共有するのが、小説を読む価値なんじゃないかな」と話しました。自分のこれまでの人生と関連づけて先生をどう感じるか、Kをどう感じるかは自由だけれど、書いてあることを大事にしよう。その文章の意味を作っているのはことばだから、ことばの意味を大事にしよう。だから辞書を引かせて、それを元に「こころ」の中でことばがどういう意味で用いられているのかに注目して授業をしました。自由な読みの裏側で、語彙力がとても大事だと思います。今、授業をしていて心配に思うのは、語彙力の不足、ことばの意味を知らないということ。簡単な言葉も出てこないとか、漢字を書けないとか、そういったことは、スマホが生徒たちの情報源の主流になってきたことから起こっているのかなと実感しています。とにかくことばを大事にしよう。そういう姿勢を持っていれば、自由な解釈があっても良いのでは。「こころ」のことば、例えば恋だったり、手紙だったり、いろんなことばをまず辞書で引かして、「こころ」ではどう使われているかを考えさせた時、恋は利己心につながる、それは自分本位な気持ちに恋にはあるからだといった意見が出てきました。そういう発言に触れた時、辞書のことばと自分のことばが生きた意味としてつながったんだなと実感しました。辞書の決められたある一定のコードとしての意味と、その文章の中で使われる意味が、どこに共通点があり、どこに差異があるのかを考えることが、後々の個人の読書にもつながっていくのではないのでしょうか。

A（総合学科24期生） 拡大解釈をする側の意見を言いたいと思い

こと」だと思います。今は実を結ぶものがなくても、将来的に何か役に立つことがあるのではないか。僕は今、勉強の優先度が低い、生きていくのが必死な子どもたちの学校に勤務しています。そこでは授業が実生活で役に立つわけではなく、働いている子らに話を聞いても理科の知識は全く役に立つてはいない。しかし、卒業生が遊びに来て話す中で、授業の内容は覚えていないけども、僕が言ったちよつとしたことを覚えていたりするんですよ。あつ、これが僕が教師をやっている理由なんやなと。かつて、僕も小山先生に、「鋭い」とか「浅い」とか、ズバッと言われて傷ついたことがありますが、その放課後「浅い」と言われたことについて考え直す時間があって、それが大事だった。小山先生がいっぱい話してくれたことは僕の心に残っていて、そういうのを大事にしたいなと思うのです。今教えている生物の知識がどれくらい役に立つかは分かれへんけれども、将来ちよつとでも何か芽吹くものがあればいいと思います。今日は、教え子たちが授業をする姿を見られて、小山先生は本当に幸せやなと思いました。

梶井 「私達が立っている場所」がどんなふうにテキストに向き合っていて、どんなプロセスを経てきたのか、かなり見えてきたかと思えます。では、テキスト解釈の問題、実生活や人生との結びつきの問題をどうしてきたかというあたり、小山さんからお願いします。

小山 杉本先生からご指摘のあった場面を、実は私、覚えていないんです。ただ、その当時も、いいと思ってやり過ごしていることはないと思います。そして今は、「読み取ることの中に、自分たちの考えの可能性が生まれてくるんや」というつもりで、読み取ること

に尽力しています。M先生から「考えることと読み取ることを仕分けしながら」というお話がありましたが、そういうことも頭に入れながらやろうとしているつもりです。だから当時のことを思うと、杉本さんに迷惑かけたなあと。どんな小さな場面でも一言発言を入れとかないかと、そういうことを感じます。過去に戻るものならそういうふうに対応したいと思いました。

生活との結びつきということでは、「個人ではなく複数になれるように。ことばを共有することによって」ということになります。それが実際、どういうふうにして明かされていくのかというと、私の場合は、年々、生活の中で生きる、共有して、共同で生きるというところに帰されていって、今自分たちは生きているんだ、あるいは力を得ているんだ、あるいは前向きな気持ちを温存させていく、創り出していくんだ、というような個別のベタベタした前向きな気持ちの創造ですよ。そういうのを目標にしているような気がします。そういうことに帰されていくというところに、授業の目標は設定されざるを得ない。そう思いながら日々やっているところです。経験が追いつかないというのは、常に起きることで、それでも人は、考えの枠を超えた部分を知ったときにものすごく驚いたり、現実が解けた気持ちになったりして、それを説明できるだけでも楽しいことです。それは現代社会に生きるということまでつながらなくても、小さな喜びをたくさん顕在させて、その顕在させていくものを幾らかつなげて、Aくんが言ってくれましたが、それは自分がどの場所にしようが、そして何を考えていようが、どういう状態にあらうが、思想・考えとしてはどこまでも行くことができる。けれども

と考えました。その頃と今とでは、生徒の様子は変わってきていると思います。人間関係のつくり方も変わってきている。班のつくり方、班の中のやり取りの仕方とか。でも、高校生の考える、若者の考えることに大きな違いはないと思います。一方で私のアプローチの仕方が、今までだったら「浅い」の一言で済ませたことを、たぶん今では「浅い」の一言で切っていることはない。それぞれの時代に高校生の現在の姿があるので、自分はそれに十分ついていくべきと言いますか、変化しないといけないと思うのですが、それができたりできなかったり、大先生になったり小先生になろうとしてできなかったり、現在に至るというようなことです。指導の仕方については、毎日苦勞が尽きませんが、でもそれが楽しいです。

植山 いろいろなお話をたいへん楽しくうかがいました。この議論の中では「役に立つ」「正解」とかいうのが、ある意味ヒール役になっていますが、本当にそうなのでしょうか。みんな自分の答えを探し続けていますよね。答えは要らないと思っている人はいない。そういう意味では「ずっと自分の答えを探し求めているという正解」があるのだろうか。特に思ったのは、それが意識的であるということ。小山先生がおっしゃるには失敗してもいいやんと。失敗を意識的にやるのかなと。覚悟しながら失敗して、そこからまた成功という正解を求めていこうとするあり方、姿勢を身に付けることが、大きな学びだろうと思ひながら見せていただきました。

私の恩師で小山先生の恩師でもある野地潤家先生が、「ただの真面目な人はダメです。アンビションがない人はダメです」と。アンビション、つまり大望を追い求めながら生きていくことが大事なの

帰り道を考えなければならない。考えたことがどこに辿り着くのかという、やはり自分の足元です。そこに戻ってくる。そのプロセスが大事さを明かしていると言いますか、本物ぶりを証明しているということになるのでしょうか。

K（大阪公安局・総合学科14期生） 私は大阪公安局に勤務しております。今年の三月までは北海道大学の水産学部で学生の世話をしていました。二〇一一年～一二年、「私達が立っている場所」を受講し、その当時、小山先生が「私達が帰っていく場所」をやりたいとおっしゃっていたのが今日のことだったのかなと思いました。

私が在学していた頃に比べると、高校生を取り巻く環境は大きく変化したと思います。例えば、生成AIができ、チャットGPTといったサービスに高校生もアクセスでき、それを使える環境になった。さらには、賢く見える話し方とか、ファスト教養というのがもてはやされるような時代になりました。また最近では、争いごとに勝つため、自身が優位に立つため、といったことにことばが使われることが多い。いわゆる論破というものが流行り出している。そういうことに危機感を持っておりまして、現在の高校の授業の中でも、それを回避しないといけない状況になっているのではないかなと。25年間、「私達が立っている場所」の授業をされていて、課題の取り組み方や受講者の反応などがどのように変容してきたかを、小山先生にうかがいたいと思います。

小山 はい。経緯について少しお話しします。私が一九九九年にこの学校に赴任した当時は、学校設定科目を意欲的に作っていくという空気もあり、自分の国語の単元が授業名にできる絶好のチャンス

だとおっしゃってくださいました。自分の大望を掲げ、もっと大きくしていくという役に立て方というのがあるのではないかと考えるわけです。

杉本 専門の立場から申しますと、生成AIの時代になり、いろんなものがAIに代替されると、特に若い人は思っています。高校生も思っているのではないのでしょうか。チャットGPTに投げかけたらそれなりの答えが返ってきますが、最後まで絶対に置き換えができないものは何かと申しますと、自分の頭の中でモヤモヤと考えていることを言語化することです。それだけは、チャットGPTに「私の考えていることをことばにしてください」と投げかけても絶対にしてくれない。そのチャネルはないので、自分なりにやるしかないのです。自分の考えを誤らずことばにしておくためには、必ずことばに向き合っていく皆さんの経験が必要だと思います。本日の研究授業を拝見して、今宮高校の卒業生、現役の生徒さんは、まさしく自分がモヤモヤ考えていることをことばにしていきたいという、これから最も求められることばの力を育んでおられると思います。自信を持って今後とも取り組んでいただきたいと思います。

ダイジェスト動画 「私達まつり」第1弾 卒業生による授業

https://www.youtube.com/watch?v=fq679m-PvGO
「私達まつり」第1弾 研究協議ダイジェスト版

https://www.youtube.com/watch?v=t7tGOsua1zl

「私達まつり」第二弾

―スペシャルトーク、ディスカッション―

◆第一部・スペシャルトーク◆

◇勝手に思う、勝手に面白がる◇

金城宗幸（かねしろ むねゆき）

今宮総合学科8期生。『ブルーロック』『僕たちがやりました』『神さまの言うとおり』など、多くのファンを持つ漫画原作者。第二次世界大戦の沖縄戦についても語り継ぐということを言及。今宮高校一〇〇周年記念誌で「私達が立っている場所」の授業に触れている。

こんにちは。僕が生業としている漫画原作は、アイデアをネームという形でコマ割りにし、セリフを書いて、キャラクターと名前を考える。映画でいうと、脚本・演出まで。あとは漫画家に監督と演者を担当してもらいます。漫画家志望だった高校時代、あまり受験のことも考えず、約三分の二に上る割合で好きな美術と体育と国語の授業を選択していました。進学すると、大学ではみんな絵がうまくて。それでも自作漫画を投稿したところ、担当編集者が付いてはくれたのだけれど、その後も絵がうまくならず、一時は芸人に転向しようと考えました。それで上京したら、漫画編集の方が原作を書いてみないかと声をかけてくださった。飯を食うために、はい、やりますと答えたのがきっかけです。

例えば、僕はサッカー漫画などを描いていますが、日本代表にストライカーがいたらいいのというような、子どもみたいな発想から始めたりします。どうすれば売れるかよりも、純粋な発想を大事にしたい。それは、小山先生が、僕はこう思う、というのをまず引き出してくれて、みんなが聞く態勢を作ってくれた「私達が立っている場所」とリンクしている。僕はこう思うと言っているんだよ、という空気が大事なことだったな。仕事の場で、僕がこう思うと話す、編集者や漫画家さんが受け止め、聞くことを大事にしてくれている。そのあたりに繋がりを感じます。

勝手に思う、そして面白がる

まず勝手に思うのが第一段階。次にそれを面白がることです。「面白いと思う」のではなく面白がる。勝手に何かをする人を面白がるのが何かを起こしていく。面白がる人になる、あるいは面白がってくれる人を見つける、それはすごく大事なことだと思います。

僕の仕事で言うと、中には原作者の言うとおりに漫画家が描くべきだと思っている編集者もいる。それでうまくいく場合もあります。僕が、僕は一人ではできない体験を作った方が意味があると思う。勝手に思う、面白がる、形にするという複数人による一連の過程の中で、何かが起こると思うのです。

本能的な快・不快という感覚を優先しよう

「面白がる」というフレーズを出しましたが、「面白い」には快か不快かという動物的なものと、興味深い、インタレスティングとい

「私達」の授業と漫画原作はリンクしている

高校時代、「私達が立っている場所」の授業は、迷うことなく受講しました。担当の小山先生は、いやもう変な人で、なんか動物柄のネクタイつけてポケットパンパンで。

授業では、本を読んで、まず自分が思うことを話し、次はグループで話し合う。小山先生は「本質ですけど」とか、「本質ではない」とか、「本質」って頻繁に言うんですよ。本質って何か。作者の意図はどうか。当時、先生は一応の答えを持っておられたけれど、生徒がどう思うかを引き出そうとされていたように思います。生徒それぞれの観点や日々の言葉を探ってくれていた。一人ひとりを面白がってくれているなという印象が大きいです。答えがないものを授業にしていきたいと思いますというのが僕は好きだったので、今もよく覚えている。授業の内容よりも小山先生を覚えています。同じ目線で喋ってくれる大人がいると。だから印象に残っているのです。

漫画原作の仕事に携わっていく中で、「私達が立っている場所」の授業との繋がりを感じます。アイデアを出して、みんなでディスカッションして形にする。「私達が立っている場所」の時もそうでしたが、勝手に思うことが大事だと思います。最初からこんなものを作りましょうではなく、勝手に思う。ネットなどで調べたらお勧めが出てきて、自分では選んでいるつもりだけれど実は選択肢を出され、自分が思っていると思わされていることが多いです。僕はそういうシステムや社会性から逸脱して、純粋に勝手に思うところに立ち返るようにしています。

う人間が知性で感じるもの、その二つがあると思います。読者に届くという意味で考えると、快か不快かをまず提示しないと人は興味を持たないですよ。僕の作品のいくつかは当たっているが、一方で、すべて打ち切りというのもある。その違いを考えると、最初に快か不快かを提示しているかどうかです。これはエンタメの話ですが、最初からロジックだけでいくと、どれだけ面白くても見向きもされない。快か不快かを打ち出したら気になってくれる人がいて、その人に向けてちゃんとしたことを言ったら聞いてくれる。何かに興味持つきっかけには、快か不快が先にある。僕が小山先生を変なやつて思ったのはそういうことだと思います。この人はなんだろうって気になったから、この人の言うことがどういう意図なのかを考えた。人の心をキャッチするきっかけはまず動物的な感覚だろうと思います。大人になると知識と情報とロジックだけが増えていくものですが、本能的な快・不快のセンサーを育てないと、割に合わないぞっていう気がするのです。

話を戻すと、最初に自分が勝手に思うことに関して、世の中の評価とかはいったん置いて、快か不快かのセンサーもはずした上で、自分って何を思うんだろうと捉えることが大事だと思います。そこからしか何も始まらないのじゃないかなと思っていたところ、今回のこのトークの話があって、確かに「私達が立っている場所」でやっていたなと改めて思い起こしました。

生きていると自分勝手なことだけではいけないのですが、勝手に言ってるな、勝手に私も言ってみる、という状態は深い信頼関係の上に成り立つと思います。この人は私のために言ってくれていると

か、私はこの人のために言ってるとかいう意識が入ると、勝手に思うことにはなっていない。僕はキモさと呼んでいるんですが、みんな気持ち悪ければ気持ち悪いじゃないか、そのほうが生きやすくないか、と思うのです。正しいとかきれいとかを優先すると、面白がるできない。自分もキモいし、勝手に思っているだけやし、自分が勝手にお前のことを面白いと思っているという感じが信頼関係にもなるし、ディスカッションするときに境界が変にならなくて済む。漫画家さんとの打ち合わせで、僕の方が喋ることが多いのですが、僕がその漫画家さんを面白がることのできるからで、それは「私達が立っている場所」の授業で学ばせてもらったなど。アマゾンとかネットフリックスなど、便利さがみんなの価値観を統一していき、こういうものがないものだと思わされる。それも楽やからいいんです。僕もそれらの利便性を享受しているので。それでもどこかで自分はこう思うのにと、というのが出てくる。そんな時、自分自身が勝手に思うことを止めないでほしい。100%何かの影響を受けないのは無理ですが、誰かに用意されたことではなく、自分で思い、感じ、考えるという、勝手に生きる力みたいなものが、今後、必要になってくると思います。自分で選んでいるつもりで選んでない感じにならない人、ちゃんと選んでいる人、そういう人生を僕は見ていきたい。勝手に思って勝手に面白がって生きてほしい。僕も勝手に生きていこうと思っています。

味で小山先生はすごい先生だと思います。おもしろい人は、変な人が育てることが多いんです。金城さんのお話とも共通しますが、変な人はなにか残すところがある。だから、学校にもっと変な人が増えてくるといいと思っています。

資料にも記しましたが、「変化の激しい時代に大事にしたいこと」に「快適な生活、快適な学びに向かいがちなスマート社会においてこそ、ノイズや割り切れなさとの出会い、既存の視野や価値観の外部と向き合う」。一言で言うところ「痛みや不快さも伴った学びが重要」です。他人と関わるって不快なんです。人は絶対他者ですから、気持ち悪い存在です。だからその気持ち悪さに向き合うことが重要だと思います。肌が合わない、においが違う人とこそ関わった方がいい。そうしたら確実に出会いが広がり、それぞれの違いに気づく。自分はこう思うんやけどなってボソツと言ったときに、おもしろいと言ひ合える関係になったら、教室も学校も社会もよくなる。これが共生の関係。私はこう思う、おもしろいなという感覚です。

不快さを面白いと思えるか

不快なこと、わからなさを引きずるということについて、「ネガティブ・ケイパビリティ」という専門用語があります。ネガティブな感情を引きずれることが、強靱さ、柔軟さに繋がるということ。言い換えると、問いと答えの間の長いかどうかです。つまり不快感に耐えられるか。不快な人をおもしろいと思えるかどうか。この一つで今の教育課題すべてが解ける。金城さんのお話を伺いながらそう感じた次第です。優れた教育者はトゲを残すんですよ。抜けへんと

《 真正の学びが人生を豊かにする 》

石井英真（いしいてるまさ）

京都大学准教授、教育方法学学力論を専攻。学校現場への助言や連携など活発に活動。多数の著書、また学習指導要領への関わりなどで活躍中。『高等学校 真正（ほんもの）の学び、授業の深み―授業の匠たちが提案するこれからの授業』学事出版。二〇二二年八月で、「私達が立っている場所」の授業について取り上げる。

ご紹介いただきました京都大学の石井です。私の専門は教育方法学で、何のために何を教え、学ぶか、そしてどう評価するのか、といった研究をしています。一言で言うと、いい学校を作りたい。いい学校ってどんな学校だと思いますかという問いかけに、学力の高い学校という答えは案外出てきません。明日行きたいと思える学校、シンプルにそういう答えが出てくる。子どもも先生も、そして管理職も、どんな学校だったなら明日行きたいと思うか、それを考えるところから、いい学校のイメージが生まれてきます。

もう一つ、いい学校とは語りが生まれる学校。語るという行為は自分にしかできない。話し合いや発信はあっても語りはない。心が動いたら語るんです。語りたいものがあるということは、心が動く学校ということです。先生方に、この学校に何か語りたいことはと尋ね、答えが出てくるのはいい学校です。

さらにもう一つ、卒業生におもしろい人がいたら、いい学校。おもしろい人を育てている学校の先生はすごいと思うのです。そういう意

いう不快さ、気持ち悪さが結局モヤモヤを育てる。そのトゲの一つが「私達が立っている場所」の授業です。

私が小山先生と出会ったのは、『高等学校 真正（ほんもの）の学び、授業の深み』の本です。英語で言うところセンテック、真正の、あるいは本物、そんな意味です。本物の学びという観点で、授業の匠たちの骨のある、哲学のある深い授業を残したいと思い、何人か先生を紹介してもらって事例をまとめたのです。小山先生と面識はなかったのですが、国語ではまずお名前が上がってくる。それでいろんな資料を拝見し、おもしろい、間違いのないと思いました。

例えば、ある生徒が先生に言いたいことある、でも逆らっているとは思われない。意見なら言えるんじゃないかと思ってもうまくいかず、最後は顔を真っ赤にしてこう言った。「これは文句と違う、意見や」。そう言って切れるしかなかった。ちゃんと意見を意見としてことばにすることができなかった。そこで小山先生は反省されるわけです。これこそがことばの教育の原点だと思います。ことばを学ぶってどういうことを問うところからこの実践が始まった、というエピソードに触れ、真正の学びと重なると思ったのです。

学んだことが生きてこそ「真正の学び」

真正の学びは、学校で学んだことが生きて働いていないんじゃないですかという問題提起から始まりました。具体的に言うと、バスケットでドリブルやシュートが上手だからといって、試合でうまくプレーできるとは限りませんよね。実際に試合でうまくできるかどうかは、状況判断ができるかどうかです。だから、試合でプレーで



きる力は、実際に試合しないと育たないじゃないですか。試合に当たるものを全くやらずに教科の授業をする結果、生きて働かない学力になっているのと違いますかというのが、真正の学びの原点です。学校の外側や将来の生活で遭遇する本物、それをもっと経験させていった方がいいのではないのかと。

例えば、三権分立の三権とは何か、司法・立法・行政と、普通の学力があれば空で言えます。それに対して、社会科が得意な一部の子はこんなふうに説明できます。「司法・立法・行政がこの三角形でお互いに牽制し合っている」と。つまり、大抵は概念だけわかっているレベルで終わっていないかということです。概念として三権分立を掴んでいても、実際に「国会軽視の総選挙」というような報道があったときにキャッチできない。学んだことが生きて働いて使える学力になっていない。学校の外側と比べたときに、学校は嘘くさくないですかというのが根本の問いかけです。

古典文学が好きで修士で研究している教え子に、高校の時、古文好きだった？と聞いたたら、嫌いだったと言うんです。でも、大学に入り、本物の古文の研究をしたときにおもろさに気づく。つまり、高校まで本物と違う学びをさせられて、本物の面白さを知らないまま、その教科や分野を嫌いになっていることが多すぎやしませんか。これは勿体ないですよ。高校というのはある種、完成教育です。数学などは高校で最後の人もいます。高校での出会いが悪かったら一生数学なんて学びません。少なくともその教科の一番美味しいところを、学校の中で何とか保証できないかというのが、真正の学びです。

ことばを学ぶことは人生を豊かにしていくこと

ことばを学ぶとは、国語の問題集を解けることとは違うでしょう。社会に参加していくためにはことばでコミュニケーションしていかなくてはいけないわけです。生きていく上でことばが必要なんです。言語生活を豊かにしていく、それがことばの学びと違うでしょうか。人はことばを操りながら生きるわけです。その時に、ちゃんとことばの学びができていくかが問われてくる。まさに小山先生の実践は、この言語生活を豊かに経験することになっていますよね。

良質のことばは、人生に肉付けしていくことになります。読むとはどういうことですか。「読む」と「読み深める」はどう違いますか。最近を読むまで行かず、情報収集ばかり。読み深めるというのは、テキストと向き合って自分が問い直されるときです。深まるとはどういうことかという、同じものを見ているけれど、違っているように見える。同じテキストだけれど、全く違って読めてきたというのが読み深めるということです。言語生活に繋がる、読み深める経験を、小山先生は実践されているのかなと思います。

学校とは回り道するから意味があります。日常生活で経験せんことを回り道するんです。しかし、戻らへんかったら足元が豊かにならへんわけ。その戻りの部分に注力しませんかというのが、私の一つの主張です。まさに、小山先生がおっしゃる「帰ること」「帰り方を考えること」ですね。そうすると、テキストのことばが自分の足元で問い直されるんです。ここがポイントです。生活にもう一回引き戻して問い直す、というわけです。

同じものを一緒に見ることで師を超えられる

もう一つ、読み深めるには、教師が真ん中で教えるのではあかんわけ。自分がこう読んだよ、みんなどう思うのよって同じものを共に見る共同注視が大事です。なるほどな、でもまだまだ甘いなど示す。教える、学ぶではなくて、一人の読み手として生徒たちと一緒に学び合う。先生は先行研究者ですから、まだまだ甘いよって言える。そこで生徒は揺さぶられる。さすがすぎえな、とらえ方が深いね、と。出藍の誉れという言葉があります、師匠の背中ばかり追っていたら絶対師匠を超えられません。師匠が何を見たのかを見るんです。同じものを共に見ても、プロとアマとは見え方が違いますから、子どもはプロの厚みを知るのです。先生の背中を追うのではなく、先生が見ているものを一緒に見るという関係性なら超えていきます。しかし先生は簡単に負けない。その辺の特徴は『真正の学び』の本で、小山先生の実践の輪郭として整理されています。

本物の読書は、自分のキャッチしたいものに視野が限定されます。古典を例に考えると、古典は読み継がれているもの、つまり歴史が検証してきているんです。長く読み継がれているということは、いろんな人たちが試されてきた歴史です。本当のクラシカルなものは、読み手を試すんです。若いときはよくわからない。でも人生経験が分厚くなってきたらわかるわけです。なぜ古典はすごいのかという、風景が違う。知の巨人は見えている風景が違う。それには人生経験の厚みがないと追いつけません。読むということの根本は、筆者に見えている風景に追いつくことです。だから、ある対象や問いに向

き合った先人と対話し、その思考の追体験として読み深めることで、

視座が上がるわけです。よく「先行研究を検討するのは巨人の肩に乗る」と言いますが、先行研究を学ぶことによって、その人の持つ考えを血肉にできるんです。巨人の肩に乗る、つまり思考をトレースすることが大事です。そのためには、読んで捨ててしまうような本よりも何度も再読できる本との時期に出会うかも重要かと思えます。古典のことはや一文を自分の人生において理解することで、軸が生まれる。珠玉の言葉を自分なりにつかみ直したときに軸ができる。そうになると、お互いに信頼を置けますから、勝手にやっとなるわ、ということになる。そういう関係性が読むということの先に開けてくるのかなと思います。ご清聴ありがとうございました。

《学習者に自律的、相互的な深い衝動を》

山元隆春（やまもと たかはる）

広島大学大学院人間社会科学研究科教授。読者反応理論を早い時期から研究。全国大学国語教育学会元理事長。国語教育の第一人者。

ご紹介いただきました山元です。私の専門は国語教育学です。教科教育の中の国語が専門分野で、文学作品をどう教えるかを主軸に、今、広島大学で、中学、高校の先生を育てるコースで勤めています。大学卒業後、私達は定期的な会合を始め、5年ほど経過した一九八七年度、谷川俊太郎の「かなしみ」という詩をメンバーで読むことになりました。約二ヶ月の準備期間を経て、同年の夏、大学の学会で発表し、論文としての刊行は少し遅れて八九年。国語教育研究32号「現代詩における△共同性▽の探求―谷川俊太郎の「ばあい」^{*}―というタイトルです。その中で、小山さんが書いたのが、1、研究の動機・目的の（1）。見出しは「読むことの可能性、あるいは私たちは共同で読むことによってどのような彼方へさらに進み得るか!」。次は「私たちが作品を読み始めるとき、意識するしないにかかわらず、読む動機となりながら目的となっているものは、作品を読むことによって生きる力（勇気）を獲得することである」。

「私達が立っている場所」の授業でも聞いたことがあるフレーズではないでしょうか。「もはや作品の課題や関心は、その作品の中央にどまっではない。それは私たちをめぐる課題と関心である」。これは批評理論で言えば、読者反応の批評のテーゼです。最

後に「未来へかけて共同性を追求していくこと、自分を変え人を変えながら読み、書いていくこと」。今回谷川俊太郎の作品に勇気づけられながら進めていった会合や作業はどのように自分に変えていったか。谷川俊太郎自身のロマンと手をつなぎつつ、自分を変え、人を変えながら、読み、書いていくこと。これはまさに今宮高校で25年間やってこられたことだと思いますが、そのずいぶん前から、小山先生はこのような話をされていました。「私達が立っている場所」の実践の源、一つの大きな出発点というのがここに刻まれているということ、最初にお話しておきます。

三つの衝動が絡み合って読みが深まる

「自分を変え、人を変える」。文学作品を読むとはそういうことだろうと思います。一人で没頭しても人と語り合っても同じだと思えますが、作品と出会うこと、つまり詩や小説を読むこと自体、何かに突き動かされる営みではないでしょうか。

十年ぐらい前に読んだ本ですが、米国の絵本研究者ローレンス・サイプ^{*2}という人が、文学体験について一つのモデル^{*3}を提案しておりました。文学作品を理解しようとする、多くの人がテキストを分析しよう、あるいは周囲の関連情報とのかかわりで作品を解釈しようと考えてでしょう。しかし、「私達が立っている場所」の授業は、そこにとどまらず、テキストに対する「分析的反応」とテキスト上の「情報文脈状況」との関連づけを横軸に、「解釈の衝動」に基づけるということをされていたと思います。もちろんテキストについて厳密に解釈されていたと思いますが、それだけではなく「個人化

の衝動」、「喜びを味わおうとする衝動」、いずれかの衝動に突き動かされる学習を展開されていたのではないのでしょうか。

「個人化」とは、読者自身がテキストを自分のものにしようとすることです。一回読んでもすぐに自分のものにはならないので、テキストを確かめながら読み直していくことを繰り返し、個人化していきます。そして個人化したものを出し合うわけです。当然、意見にはずれも一致点もあります。「喜びを味わおうとする衝動」は、テキストへの没頭と、模倣も含めた何らかのパフォーマンスを併せ持つと、その本には書いてあります。喜びを味わう、これも大事なことで、解釈することだけが読みではないですね。好きな本は夜通し読んでおきたい、そういう受容の仕方があるのです。

皆さんは、詩や好きな言葉を朗読してみることありますか。サイプのモデルでは、『かいじゅうたちのいるところ^{*4}』で、子どもが怪獣たちになるのが、テキストと関わったせいかなと言っています。先ほど面白がるという話を金城さんから聞きましたが、面白がろうとするときに、行動に出るか、それともじっと黙って読むことに没頭するか、いずれかだと思うのです。ところが授業となると、得てして「解釈の衝動」の方に動かされてしまう。しかし、たぶん「私達が立っている場所」の授業では、「解釈の衝動」だけに偏ることなく、「個人化の衝動」や「喜びを味わおうとする衝動」の絡み合いがなされていたのではないか。そう考え、このモデルを参考として提示しました。読む間に自分の記憶を思い起こそうとしてハッとする。あるいは、没頭している間に何か言いたいことが生まれる。そういうことが起こる仕組みが、文学教育では大事だと思うんです。



それを味わってきたのが、今宮の生徒さんたちだと思います。

サイプは衝動には三つあると言っていますが、作品と関わる時の衝動にはいろんなものがあるはずです。読んでいる時は「喜びを味わおうとする衝動」や「個人化の衝動」に突き動かされ、次第に好きになっていくわけです。それを発揮できなければ、国語は嫌いということになるんです。国語教育を専門にしている立場では、三つの衝動をどう絡ませていくのかを絶えず考えていかなければいけない。「私達が立っている場所」の授業の中では、その絡ませ合いがうまく行われていたのではないのでしょうか。

リテラチャー・サークルという学習プログラム

このようなことを学習のプログラムとしてできないかと、私も長年の間にいくつか提案をして、十年前にアメリカの実践書『リテラチャー・サークル実践入門』^{*5}という翻訳書を出しました。リテラチャー・サークルとはブックトークと同義で、読んで語り合うというものです。この学習スタイルでは、ひたすら読んで対話し、また読むということを繰り返していきます。対話する時間は10分ぐらいで、解釈したり、個人化した成果を交流したりします。読んだ内容をお互いに聞き合う中で、自分と違う個人化をしている人を知ることができると、自分と同じものを知ることでもできる。

例えば「羅生門」の冒頭の1ページだけでも読んで気づいたこと、ハツとしたところ、大事だと思ったところをメモして確認してみる。そこから始まる対話が、リテラチャー・サークルの醍醐味でもあります。選んだ本をグループで読んで話し合い、それから、もう一回、

自分で読み直す、というやり方です。別々の本を選んだ場合は、紹介合って広げていくことができます。一冊の本でやる場合もあれば、短編を集めた本でやる場合もあり、このようなサイクルを持つような方法も研究したり紹介したりしてきました。その出発点が、小山先生たちと行った谷川俊太郎の研究会でした。

リテラチャー・サークルでは対話や話し合いがうまくいかないこともあり、問題を共有する時間を設けていくことも提案されています。どんな話題で話し合うかが、話し合いのテーマになります。

例えば話し合いのテーマとしては、こんなものがあります。「この本から思い出したことを出し合おう」「思い出そうとしたかを話し合おう」「友達になれそうな登場人物像は」「この本で一番大切なところはどこか。その理由は」「作者がなぜこのような本や文章を書いたのだと思うか」など。わかりませんという答えもあると思います。作者はなんでこんなふうにか書いたのかといった大きな問いでも、課題として話し合う中で、自分が気づいていなかったいろいろなことに気づいていく。対話に繋がっていくのではないかと思います。

これをシェール・シルヴァスタインの「^{*6}おおきな木」^{*7}などでやっていくと、ものすごい論争になっていくと思います。リングの木と少年の話で、少年が大きくなる間ずっとリングの木は与えるばかりという話です。いい話なのだけれどもちょっとつらい話で、それを使って話し合うことの意味を意識していくというケースもあります。質問を掘り下げるフォローアップも大事です。お互いの述べたことについて何を言えいいのか、大事なのは質問の仕方です。フォローアップの仕方を工夫すると、会話が盛り上がっていきます。一方が

感想を言ったらそれを掘り下げる質問を考える。するともう少し話を続けられる。どうですかこの本はと質問して、作者が強く生きようと思ったのだと思いますという答えが返ってきて、そこで終わってしまおうと寂しいですよ。少なくとも、どこでそう思ったか、なぜそう思ったかをフォローアップの中で言わなければいけない。聞かれて答えなくなるような質問とはどうしなければいけないか。お互いの考えを引き出していくことが大事になると思います。

一緒に考える時間が学習者を育てる

読みの理解とはなかなか難しいのですが、問いかけて聞き出す工夫をしていくことが大事なのではないかと改めて思っています。小山さんにだいたい聞き出された経験から、そう思います。私自身、このようなことを考えてきたわけです。自分を変え、人を変えるフレーズが今も心の中にあります。エフィカシー、これはバンデューラ^{*8}が言った「自己効力感」に対して出された「内部の集合的効力感」です。『自立的で相互依存的な学習者を育てるコレクティブ・エフィカシー』^{*9}という翻訳書が出ています。他の人と一緒に行動することにより多くを学ぶことができるという生徒の信念、一人では決して発見できなかった豊かな意味の気づきには終わりがありません。そういったことを教えてくれる「私達」の授業、小山さんのアプローチでもあるし、今宮の人たちの経験でもあります。

終わりが無い、絶えずその先へと思いを向けていく、そんなメンタリティを「私達が立っている場所」の学びは教えてくれるのではないか。終わりというのは、自分の外の何かの基準による終わりな

のであって、意味を作り出すために自ら終わりを設ける必要はない。そこは自由だと思います。次に向かう喜びを心に抱いていくことができます。いいのではないかと思います。

自立心・探究心・協調性のある教室。それが実現できるのは「いっしょに考える時間を持ちながら沈黙のなかにいる」「居心地のよさ」によって、そうでなければ決して発見できなかった「ゆたかな意味」が当事者たちにもたらされて、一人ではけっして発見できなかったことに気づく、そういうことではないでしょうか。これはキーン^{*10}という人が『理解するってどういうこと？』^{*11}という本の中で言っていることです。仲良くなりましうではなくて、安心して沈黙にすることができ、そういうことも保証する場というのは、豊かな意味に気づく条件になっていくのではないか。コレクティブであるということが、それまでは気づかなかったテキストの「ゆたかな意味」を発見する手がかりになる。そんな見解を「私達」という試みの中で共有されていたと私は考えます。

*1 広島大学国語教育研究32号 一九八九・〇八・〇七発行

*2 ローレンスR. サイプ 一九四九〜二〇一一年 アメリカ合衆国 教育と文学の研究者

*3 文学的理解の力動的過程図 『読者反応を核とした「読解力」構成の足場づくり』溪水社 二〇一四年一月 山元隆春 著

*4 『かいじゅうたちのいるところ』富山房 モーリス・センダック作（じんぐうてるお 訳）

◆ 第二部・ディスカッション ◆ いことばとことばの教育に希望を

【参加者】

スペシャルトークメンバー

金城宗幸（漫画原作者）

石井英真（京都大学准教授）

山元隆春（広島大学教授）

梶井英人（京都大学・関西大学非常勤講師）

小山秀樹（大阪府立今宮高校教諭）

ご参加の皆様（教職員、卒業生、保護者、一般の方 約50名）
（敬称略）

小山 第二部・ディスカッションは、スペシャルトークをしていただいた三名の先生方、そしてご参加くださったっている皆様とともに進めたいと思います。進行は私達まつり第一弾の研究協議に引き続き、梶井英人先生にお願いしております。梶井先生は、大阪府立高校に定年までお勤めの後、現在は、京都大学、関西大学で、国語科教育法などの授業をされています。先生には他の誰にも書けない『国語力』観の変遷』という著書がありまして、そこでは国語力の変遷と未来の展望が語られています。先生、よろしくお願いいたします。梶井 今からの協議は、フロアにおられる皆さんが主役です。今日の会は国語の授業に関する集まり「土曜塾」シリーズの大きなまつりということで、やはり現場の先生方の今後に活かされるかたちに

*5 『本を読んで語り合うリテラチャー・サークル実践入門』溪水社 ジェニ・デイ、ディキシ・リー・シュピーゲルほか著（山元隆春 訳）二〇一三年四月

*6 シェル・シルヴァスタイン 一九三〇〜一九九九年 アメリカ合衆国の作家、イラストレーター

*7 『大きな木』あすなろ書房（村上春樹 訳）二〇一〇年九月

*8 アルバート・バンデューラ 一九二五〜二〇二一年 カナダの心理学者

*9 『自立的で相互依存的な学習者を育てるコレクティブ・エフィカシー』北大路書房 ジョン・ハッティほか著（原田信之 訳者代表）二〇二三年一〇月

*10 エリン・オリヴァー・キーン アメリカ合衆国 小学校教師、現職教員の授業力向上サポーター

*11 『理解するってどういうこと？』新曜社（山元隆春・吉田新一郎 訳）二〇一四年一〇月

できればと思いますので、忌憚のない意見を出し合い、質問も含めてやり取りができたらと考えています。まずは、スペシャルトークのお三人から、お互いにご意見を出していただいてディスカッションのきっかけにできればと。

金城 僕が新幹線でこちらに向かいながら考えてきたことを、うまく拾ってくださってありがとうございます。石井さんのお話に「本物、オーセンティック」ということばがありました。それは、一次的体験というか生（なま）の体験、情報のような与えられたものではなく自分で勝手に思ったことであるとか、掴みに行くことであると捉えているのですが、合っているでしょうか。

石井 そうですね。一般的にオーセンティックラーニングというと、実生活とか学校の外側とつなげるということですが、自分に正直ということの意味します。オーセンティック（真正）とは、嘘臭くない、正直であるということです。世の中のドロドロに向き合う時に、快・不快という感じが当然発生し、そこで自分が問われる。世を問うことで自分が問われ、そこで自分が正直になっていく。自分の内部だけを見ても自分のことは分らないでしょう。外部とかかわって初めて自分が分かる。一次体験というのは、世界を体験するだけではなく、自分に気づいていくことだと思ふのです。先ほど、金城さんと立ち話をしていて、なんとなく自分と近い空気感みたいなものを感じたのですね。どうしてかなと考えたら、自分に正直に生きてきているということかなと。私は淡路島出身で、軋轢もあった中で割といい子ちゃんて来たのですが、大学でバンカラの雰囲気にはぐされてすごく楽になったんですよ。まさに自分に正直

であること、そこに至るのかなと思います。今の時代は、自分に正直であることが難しいし、自分が何者なのか分かりづらい。だからこそ、本物の学びによって解いていくわけです。山元先生のお話を伺い、読むという経験の中で、解釈の衝動とか、個人化の衝動などがモノトーンに染められてしまうことでドロドロしたところが単純化され、かつ押し付けられるから面白くない。そういうことになりがちなのかなと思いました。本物の文学体験とはどういうことなのか、本質の部分を分析的に示してくださいなと思いつながら聞かせてもらいました。

山元 ありがとうございます。深い読みとは、脳が気づかない、読者自身が気づいていないことの掘り起こしのようなこと。人とやり取りしたり、自分の中で考えたりすることで深い読みが起るのかなと思います。自分に正直に生きるのは難しいことですが、考えたり、人と話したりする中で気づくことはたくさんあると思います。

梶井 はて、深く読む行為を共にするというのを、実際、現場に持っていくのか、教室でできるのか。通りいっぺんの読みではないですよ、一回読んで終わりではないですよ。図式化して終わりではないですよ。何回も読まれ、突っ込まれますよね。一人じゃないですよ。それが我々高校の国語教育であるわけですが、どの辺が現場に持っていける部分なのでしょう。

K（神奈川県立横浜S高校） 大学院にいた時、たまたま小山先生の授業を知ることがあり、二〇〇二年に「私達が立っている場所」の授業を見せていただいたのが最初でした。その時、定時制との関係で、下校時刻と部活動の諸対応ができないという問題だったり、



K（大阪府立I高校） 私は国語科の教員ですが、例えば、石井先生の「社会科は好きだけれど社会は嫌い」というお話や、

山元先生の三つの衝動のお話を聞いて、授業では解釈のほんの一部しかできていないのではと反省させられています。読みに二種類あるのではないかと思うのです。知っていることを確認するため、つまり、分かっていることをことばにするための読み方と、全く知らないことを読むことで知る、発

見するという読み方。学校でやっているのは前者のような気がします。知っていることを増やすために、数的に読んでそのことで経験を積ませる。大学入試や社会の要請を考えると、そちらが主流にな

服装の自主規制の問題だったり、そういう話を聞かせていただき、学校の生徒指導体制や教員の方の管理の都合などと、どうバランスをとっているのかなというところに興味を抱きました。自分の経験で言うと、学校で当たり前のように行っている生徒指導について、話し合いをした時に軽く圧力をかけられたことがあったのです。先生がどういふふうな生徒からの疑問を拾い上げたのか、学校の大人の都合のようなものとおつかったことはなかったのか、またそういう時にどう工夫をされたのか、教えていただきたいと思っています。

小山 当時は「私達が立っている場所」が出来立ての頃で、自主規制の問題と下校時刻の問題を、「『である』ことと『する』こと」の授業の後に考えたりしました。「『である』ことと『する』こと」を学びはしても、教科書の中だけじゃなくて本当にそれを実践しないと学びにはなっていないだろう。学校の中の指導のあり方とどう関わるのだろうか、私も悩んでいたように思います。授業の中で生徒が自分たちの考えをまとめ、それを生徒指導の先生や学校に提出する、あるいは主張するというのは良いのか悪いのか、できるのかできないのか、考えた挙句、私はその時の教頭先生に「これは許可を求めることですか」と聞いたのです。そしたら先生は5秒ほど考えられて、「許可を求めるようなことではないですよ」と言ってくださって、私はそのことばで救われました。学校の指導のあり方など、いろいろ制約がある中で、教員は教員として生徒の力を伸ばそうとする。考えてみれば、そういうことを勝負することとしてやってきた。あの頃は総合学科最初の頃で、学校を作りたいという気持ちに後押しされていたんやなと、今になって思います。

るのはやむを得ないのかと思いつつ、でも未知のものを掴むためには、そこからの飛躍が要ると思うのです。「私達が立っている場所」はまさにそういう授業ではないでしょうか。受講者であった金城さんは、その飛躍をどういふふうな学び手として乗り越えて行かれたのか、また小山先生や梶井先生がどのように意味づけされてきたのかをお聞かせください。

金城 飛躍というと、僕も教えてもらいたいくらいです。個人化の力というか、作品を読んで、我がごととして落とし込むって教えられる？ どうなんやろ、僕は教育者に聞きたい。僕は教えてもらった覚えはないので。それでいいのだと気付かされたり、「いいよ」って言ってもらった覚えはあります。もしかしたらそれが教育なのか。」「そう、それ持つとけ」と言われたのが教育、僕が感じた乗り越えて、ゼロから獲得したものではないという実感です。

小山 教師はトゲのようなもの、種のようなものを残し、それを受けた人それぞれが自身で育んでいくというのが理想ですね。自分で育むから主体性は担保されるし、大きな可能性も出てくる。私はそれを「非連続の連続」と呼んでいます。教師の仕事はあらゆる方法を使ってトゲや種を成功体験とともに残すことだと思います。特別な場面をつくるということがヒントになるかも。

梶井 非連続って分かりやすく言えばどういうことですか。

小山 例えば私が何か生徒に言ったりする。そのことを受け止めて、そのまま知るのではなくて、その人が自分で育てていけるように、そのために最後まで教え切らないというか。言い切らないというか。そういう姿勢を保つことだと思います。

榊井 その人自身の読みを作っていく。心の高まりをどう掻き立てていくか。そのやりようには各先生の個性もあると思うのですね。とんでもないことを言うてくれる時に、そのチャンスの芽があるかもしれないですね。やりようは経験を重ねると得られるのかもしれない。キャッチしたり、突っ込んだりと。

K（大阪府立I高校） 先ほど金城さんから、「励ましてくれたのがよかった、きっかけになった」、一方では「浅い！」と言われるパターンもあったとお聞きして、その上で、榊井先生もおっしゃったようにこちらの嗅覚みたいなのが要るんだろうなと思いました。その嗅覚をどう育てて良いのかわからない。

榊井 一つには、こっちが本気かどうかと思います。「そうやねえ、それもいいねえ」って、大学生が模擬授業でかたちをやるんですけど、それではあかん。「違う。それはあかんやろ、浅い！」が、本気であるか。「ほんまに思ってたなそれって」と、言えるかどうか。その出し方の個性はあると思います。

石井 一番の飛躍は、読めていないと自覚することだと思いますね。先ほど山元先生のお話では、「このことばがなかったら」ということが核心でした。本当の深い読みとは、作者がこのことばしかないというこだわり抜いた部分を追体験できるかどうかです。追体験によつて読めていないことに気づくわけです。一度、その気づきがあれば、スポーツなどがそうであるように元には戻らないです。人生で一度、読むとはどういうことかの再定義を置くことができれば、そこからこだわり始めるんです。その一瞬があるかどうか。私はそれが飛躍やと思うのです。そうすると、実は分かっていないと気づ

代文にしても全員選択のかたちです。全員選択では、今お話になっていることは一層大事だなと思います。自分が思うこと、面白がるということが基本中の基本で、国語の教師をしていてそれ以上大事なことはないなど。自分の意志で来ているばかりじゃない子どもたちを相手に、「自分はこうや」と言えるか、テキストがあるにしても素直に言えるかどうか、40人の教室で話をしたとしても。それから、相手の意見を本気で面白がるか。それにはテキストをちゃんと読む。ちゃんと読んで、「先生分かれへん」とか、友だちに「どういう意味や」って、お互いに言えるか。たぶんこれは心理的安定性というのやと思うのですが。その辺の担保のところでは私は今悩んでいて、そのところをどういうふうに確保しているのか、フロアの方からもこんなやつてると教えていただけたらと思います。

榊井 どんなふうに場を作れるか。

小山 私は現在まで四校経験しています。教室の実情はさまざまです。まず授業の目標をしっかりと持って、指導は生徒に合わせてステップの大きさを考えてきました。そうして生徒の発言を引き出したり、ある時は大げさぐらいに「すばらしい！」と言ってみたり。リアルな場にするためにはなんでもやってきました。面白いと思える子が出てきたりしたら、その子に発言させたりとか、授業外でもこちらから話しに行ったりとか。ちょっとでも自分の指導できる幅を広げようと。参考になるかどうかわかりませんが、そんなことを試みとしてやってきたと、振り返ることができます。

榊井 今、たどり着いているところは場ですよ。話せる場ということですよ。実は、心の中で、何か心以前の、湧いているものが

く。それがあってどうかで視界のひらけ方が違いますから。山元先生のお話にあったように、精読の意味は突き抜けるということだと思うのです。ほうっ、なるほどという経験が、他の読みまで変えていく。そういう立ち止まりが大事だと思います。

ところで、小山先生は優しい先生なのか、厳しい先生なのか、怖い先生なのか、僕はすごく厳しい先生やと思うんです。「私達が立っている場所」の授業って厳しい授業なのか。どうなんでしょう。

K（11期生） 私は卒業生で、「私達が立っている場所」を受講しました。小山先生が厳しかったか厳しくなかったかですが、発表の場で、自分たちの詰めが甘い時は厳しいなと思いました。それ以外は、筋が通っているか通っていないかを大切にされていたのではないかなと思います。さっきの非連続の話ですけれども、私が思ったのは、小山先生はよく問いを立てる先生で、「ここでもまた問いが生まれました」とおっしゃっていて、その答えがすぐ出ることもあれば、結局あの問いの答えはなんやったんやろと思うこともあって、それが非連続じゃないかなと思いました。

榊井 いいですね。授業の実実が生の言葉でよくわかりますね。

小山 答えはすぐには出ないけれど、教室で自分たちの課題として共有することはできるんです。すぐれた教材は、その時点で気づいていなくても、自分と社会とのかかわりを考えさせてくれます。気づきのためには授業でのコメントや投げかけが大切です。

榊井 気づいてもらう、面白がってもらうということですかね。

K（Y高校） 興味深いお話をありがとうございます。「私達が立っている場所」は選択の授業ですよ。私は普通科におりまして、現

あつてことばになって出てくるんですけども、テキストに向き合つて、例えば「ある日の暮れ方」とあれば、「ある日のついでいつやろなあ」って、そういうことを言うてもいい、ふっと湧いてきたことを言っていいたいということをちょっとずつ積んでいるうちに、不思議なんですけれども、言えるようになっていくのは確かなことです。あえてちょっと突っ込んでことばを湧き出させる。こんなこと言うてもええんやつて思える経験を積み重ねていくうちに、言えるようになっていく感覚があります。皆さんいろんな方法をされていると思いますけれども、小山先生が言われたようなことも組み合わせやっていくのがいいのかなあという感じです。

T（大阪S学院） 子どもたちの前に立つ者として、この作品、この評論を勉強する大義のようなものを語ることがあります。評論だったら世界の一つの側面を知るためであり、小説なら虚構の中に一つの真実があるからだといった話をします。例えば、「走れメロス」のように、友だちが磔になって自分を待っているという経験は我々にはまずない。けれどもあそこという信頼や失望というものは僕たちも考える価値のあるものですよね。うちは理系の多い進学校ですので、数学、理科などで、パキッと明確な答えを求めがちな子どもが多いです。けれども、世の中、生きていると答えのないことの方が多いでしょうという話をしたら、確かにそうだ。AがあつてBがあつてどっちも正しいただけど、どっちも間違つてそう。でも選ばないといけないことがあるよね。例えば「高瀬舟」。喜助は最後、弟を殺すべきだったのか。弟の命のために医者のところに走るべきだったのか。この辺りを精査すると盛り上がります。答え

がないけれどどう思う？ そうなった時に子どもたちは、そうだなあと考えてくれています。先ほど山元先生のお話の中に谷川俊太郎が出てきました。詩を扱う際に、私が言うのは、世界の美しさや悲しさ、悲惨さというものをことばにしようとした人たちの作品を見てみましょう、ぐらいではあるのですが、大義というものが、子どもたちにこうだよとまだ伝えることができない。そこで先生方に詩を授業で扱うことの大きな意義といますか、そういうものがあれば教えていただきたいなと思います。

榊井 詩をどうするか、山元先生どうですか。

山元 昔、高校で、授業中に伝えられないことを通信にして後で読んでもらうというのを試みたことがありました。私が生まれた鹿児島県の果てで、繰り返し繰り返し、波が打ち寄せてくる風景を思い出して、それをことばにするとうなるか、自分の作った詩を通信の中に書いたんです。「かけっこ」という繰り返しばかりの詩です。詩は大事だよという伝え方もあると思うけれども、抒情を感じる、余韻を楽しむというか、リフレインなどの表現を通して心に働きかけられるのかなと。それこそ谷川さんにはたくさん絵本もあります。大事なのは詩の表現の効果を味わうようなことなのかなと。

石井 日本の授業の特徴の一つが、学級を作りながら授業をすることです。授業をしながらどういう人間関係や授業を作っていくか。実は休憩時間よりも授業中の方が子どもは言いたいことを言えるかもしれないのです。授業中には案外真面目なこと言えたりして、したら自分を発見できたりする。だから学級づくりの観点を持って授業をしていく。これは日本のお家芸みたいなところで、古くはあ

としっかり考えたらよかったなと思いました。金城さんは、高校生の時に好きな教科だけ取っておられたと。それが本来あるべき高校の姿じゃないのかな。教養と教育は違うから、好きなことを学ぶ場所がもっとあっていいんじゃないかなと思うのですが、先生方は、今後、授業がどう変わっていくべきだと思いますか。

石井 一つ逆に伺いたいんですけれども、入試に向けてとがありますか、それが、それ以前に小学校の時の思い出でてありますか。

○さん 嫌な思い出ばかりです。周りと馴染めなかったというか、価値観の合う子がいなかったの、クラスにいることが苦痛だった。石井 なるほど、そのようなことがあって不登校の子が増え、学校以外に多様な学びの場が広まっているわけですね。今、高校の普通科では定員割れが頻繁に起こり、一方で、柔軟な学びの場というか、通信制も含め、普通科以外への転入者が増えています。選択肢が増えること自体は良いことではあります、合わへん子はどうぞ外に、というようなことになって従来の学校本体がどんどん硬直化していくのが問題だと思うんです。本来学ぶ場であったはずの学校にどう回歸していくのが問われる。その一案として、高校などでは自由に探究する出島に当たるような隙間空間が必要だと思います。出島は外国と違います。つまり学校内の出島のな場で学んで、空気が変わっていくようなことができればいいかなと。実際、確実に状況は変わってきています。例えば共通テストの問題をご覧になったら分かりますが、メッセージがあるわけです。ダイヤモンドはなぜ光り輝くのかってね、物理ですが、難しい計算は要らない。教科のイメージをちょっと変えてもいいんじゃないかというメッ

のね帳みたいな発想なんです。昔、日記指導というのがあり、学級通信などにつながってくるんですけど、生活に取材して、自分はこのところ面白かったみたいなのを言い合い、読み合ったりする中で、学級ができていくんです。私は、小山先生の授業は、生活綴り方的教育方法と一緒にだと思っているところがあります。生活の中に取材してそこからことばでつながる。生活のいろんな問題をことばにしてつないでいく。ことばの指導であるとともに集団の指導。昔は生活綴り方といって作文を書くのがありました。今の子どもたちには詩の方が自分らしさを出しやすいのと違うかな。

○さん（桜和高校3年生） 私は高校三年生で、桜和高校という新しくできた学校の一期生です。今日は、父に勧められてここに来ました。私の学校には教育文理学科という学科があって教育分野について学べるのです。私が今の高校を選んだきっかけは、学校が嫌いで行きたくないと父に伝えたら、四つくらい候補を出されて、その中から消去法で決めたんですね。学校嫌いやからこそ、学校に通う子たちに伝えられることがあるんじゃないかなと、三年間、教育について学ぶ中で、自分が教育の現場に携わろうと思えるようになりました。先ほど石井先生が面白い授業の話をしていただかなかった。それと、いい学校ってなんですかという話をしてくださったと思うんですけども、私が考えるいい学校というのはまだなくて、ただ一つ言えるのは、面白い授業ってこんなじゃないっていろいろあるんです。教科書をなぞるだけの授業では面白くないと感じてしまっています。実は、父が候補に出してくれた学校に今宮高校が入っていて、今日、小山先生の授業の概要を聞いて、受けたかったな、もっ

セージがあります。結構面白い取り組みが出てきています。小山先生の実践も、総合学科の中の新しい挑戦であるわけです。そういった足元で生まれている新しい何か、そこにほんまの学びがあり、学習指導について問い直すヒントがあるような気がします。

山元 石井さんがおっしゃったことの関連ですが、面白い授業とか面白がることを目指す授業とか、そういう取り組みが大切なことだと思います。そういう取り組みの中で、今日いくつか話に出てきたような本物の体験ができる。本物というのは、実生活というわけではなくて、本気になる、見方を問い直すような学習指導、授業が行われるということです。そういう場ができるとすれば、学級集団の中で縛られるのではなく、同じものを学んでいく場として学校が変わっていくと思います。

榊井 はい。さすが、見事に言うていただきました。ただ我々には現場がある、そう。システム制度がどうであろうか。時間が来ました。これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

ダイジェスト動画 「私達まつり」第2弾 スペシャルトーク

https://youtu.be/7uTUEMgnAOo?feature=shared
「私達まつり」第2弾 ディスカッション

https://youtu.be/WYMCqOztcy8?feature=shared